

## 昭和30年代・濃尾平野と周辺の中世城館

服部, 英雄  
九州大学大学院比較社会文化研究院 : 教授 : 日本史

<https://doi.org/10.15017/17119>

---

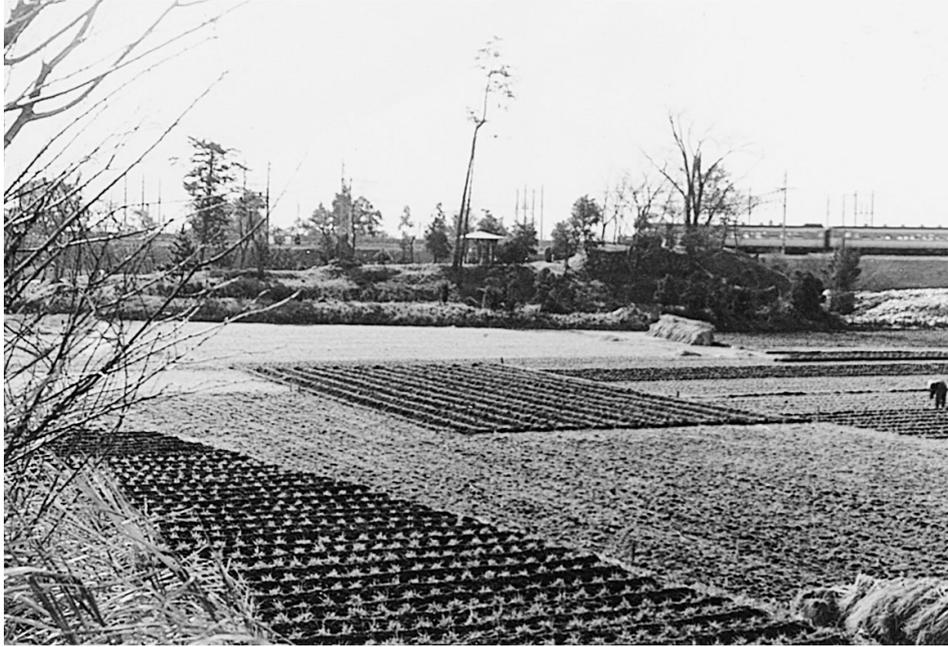
出版情報 : 比較社会文化. 16, pp.121-264, 2010-03-20. Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

# ○愛知県・尾張

写真番号（1）清須城址（清洲町北市場、古城、新川町寺野ほか）



天守台北 開発前は水田だった（冬）



五条川と清須城址（河川改修前）



天守台北（夏）



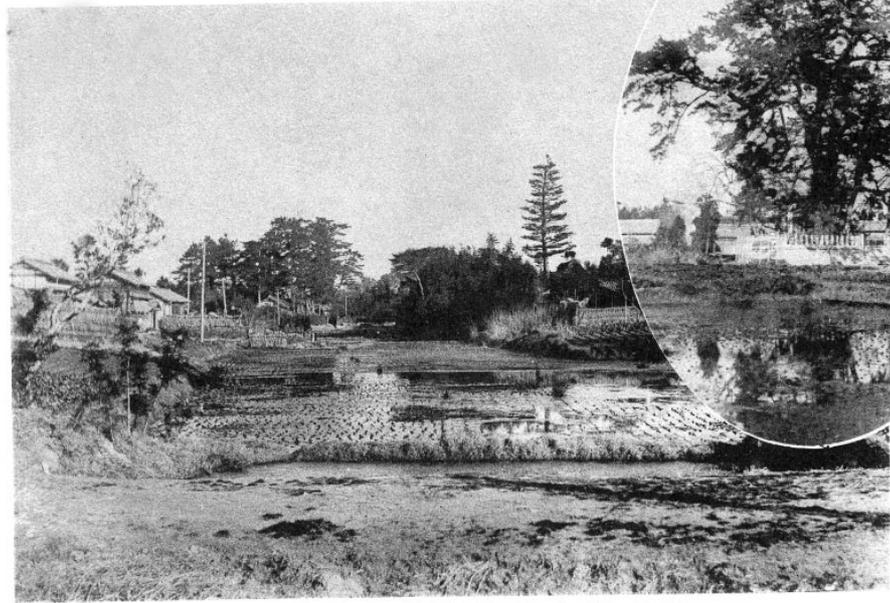
拡幅前の五条川と五条橋



空中写真 国土地理院 1963年撮影 CB-63-1C12-2868



『清須』より 原図 千田嘉博氏作成



清洲城南方外濠址及土居喜松

大正 14 年 民家の形は昭和 30 年代とかわらない  
（『愛知県史蹟名勝天然紀念物調査報告』 3 より）





御土居松碑



信長銅像



左中央の黒い森影は樹勢があった頃の御土居の松ではなかろうか、  
東に続く水田が外堀跡  
空中写真 1946年米軍撮影 M148-A-7, 186

写真番号（2）小田井城址（西枇杷島町下小田井字古城）



↓ 移転前の石碑所在地

↑ その遠望（田の中にある3人は開発業者ではなかったか。）  
線路は名鉄犬山線、奥は名岐バイパス



小田井城址（西春日井郡西枇杷島町下小田井字古城）



名鉄線路横に作られた小公園に移設された碑、今ではここが城跡と信じる人が多い。

図5 小田井城址



(A) 本丸 址



原図は高田徹氏作成  
 (『愛知県の中世城館調査報告』より)

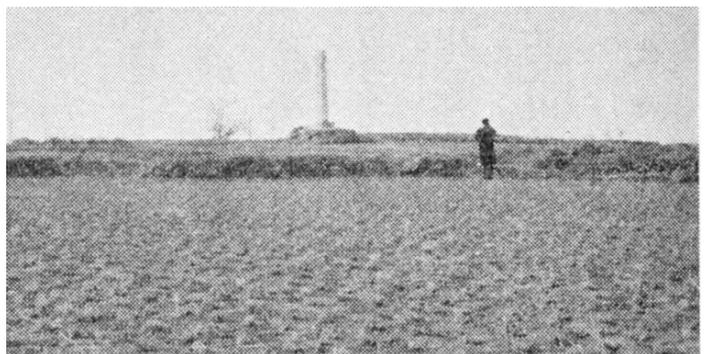
地籍図 41



空中写真 1946年米軍撮影 M148-A-7,184

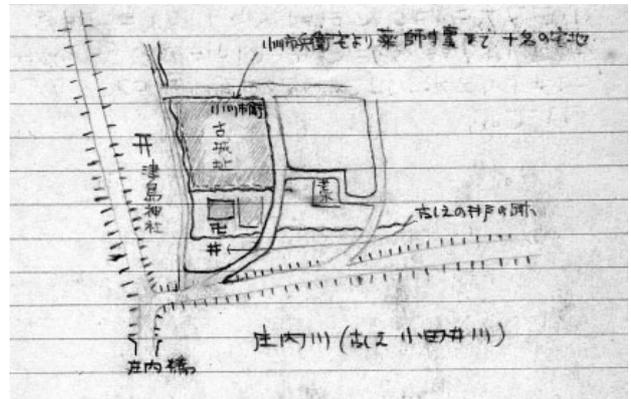
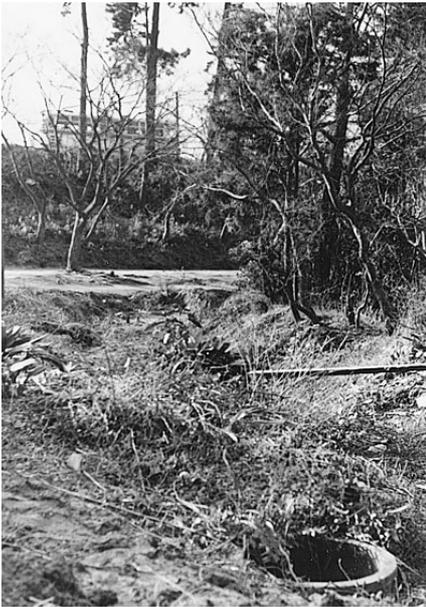


(B) 城下推定地域の現況



地図 (A)、(B)、写真とも『西枇杷島町史』より

写真番号（3）小田又六城址（西区山田町上小田井字坂井戸）



小田又六城

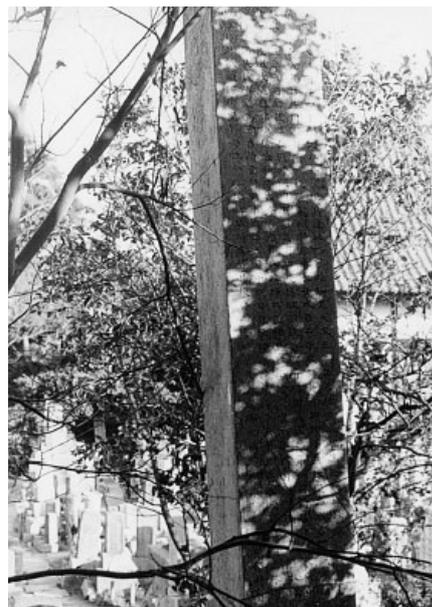
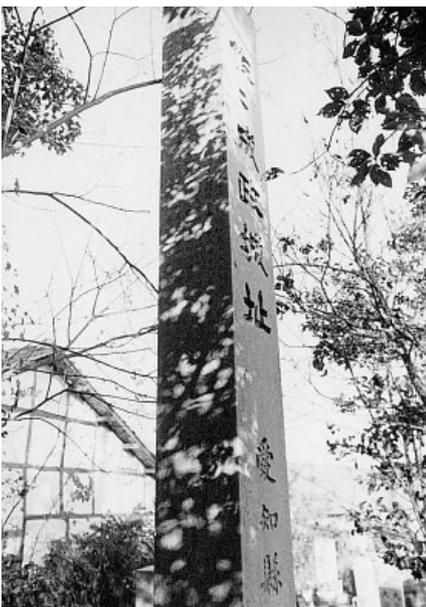
井戸跡

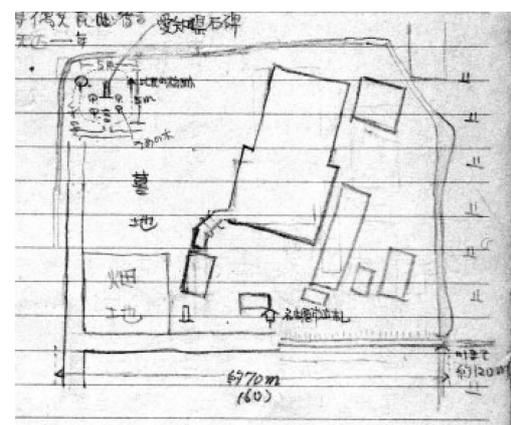
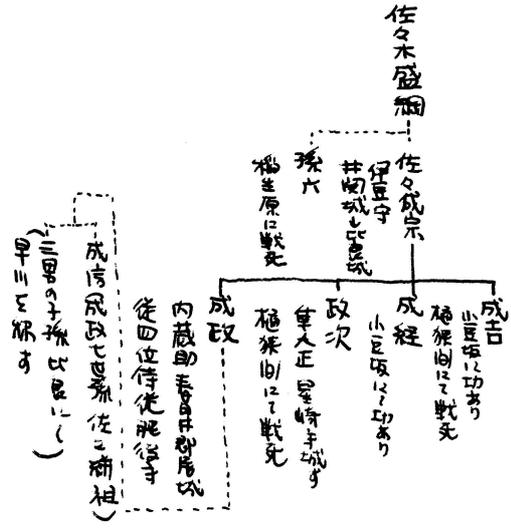
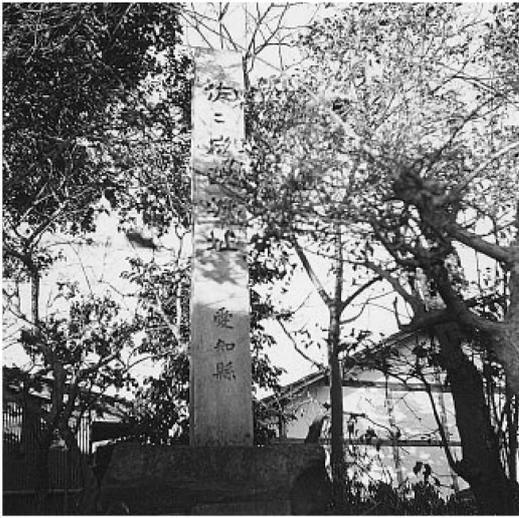
小田又六が家臣をやって汲ませ茶を立てたという。かつて庄内川の川床が高く、至る所湧水が昭和初期までであったという。奥は旧岩倉街道（拡幅前）左側は写っていないが庄内川堤防

郡誌

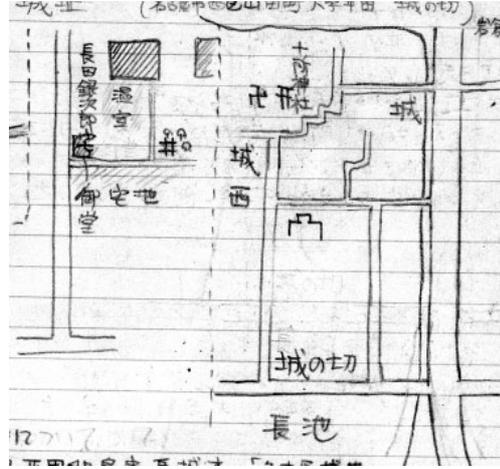
坂井戸の名称はこの城の井筋の意味にして今も尚井筋と称する地あり

写真番号（4）比良城址（西区山田町比良字城屋敷）





写真番号 (5) 平田城址 (西区山田町平田字城の切)



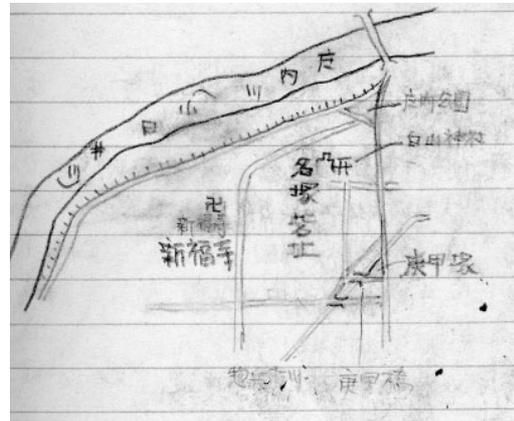
名古屋市紀要：信長時代 平田和泉守の城址である。  
城址として深井あり。城内の井戸として  
伝わっている

シュロの樹に囲まれて井戸があった。

写真番号 (6) 名塚砦址；稻生原古戦場址 (西区名塚町4-70 白山神社域内)



左が惣兵衛川用水



西春日井郡誌：庄内村大字名塚字郷にあり 云々。

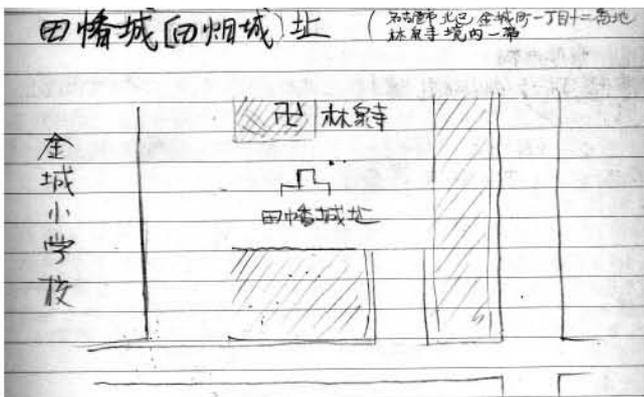
付記：名塚の地は慶長十九年 庄内川原の中より此に  
移転したるものなり。城址も旧地の方ならざるか  
後日の考證に待つ

写真番号（7）西志賀城址（名古屋市西区西志賀町）



- ・府志；在西志賀村。城主不詳
- ・金鱗九十九之墓
- ◇志賀村
  - 平手政秀古城趾当村にあり

写真番号（8）（名古屋市北区金城町1-12 林泉寺境内一帯）



写真番号(9) 沖城址 (西春村大字沖村)

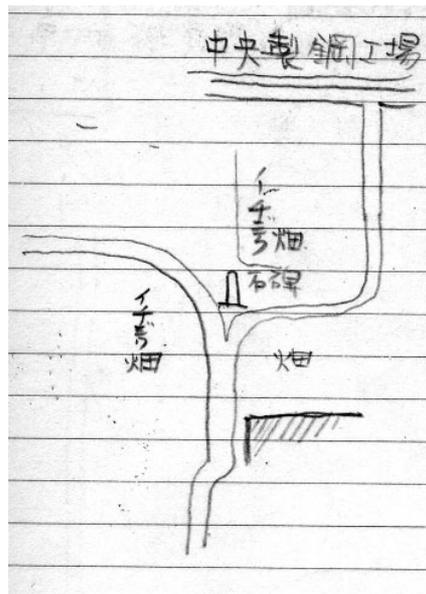


城跡周辺



沖城址

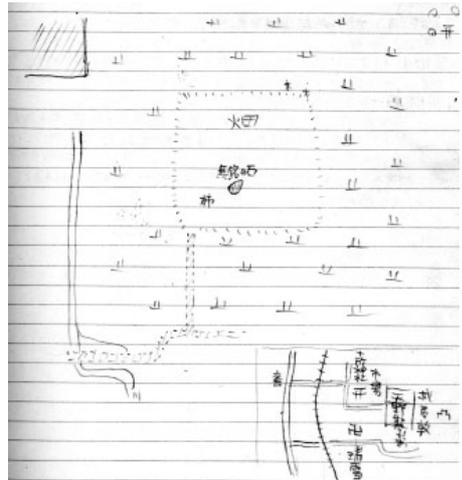
張州府志  
「里人曰曰。林主計居之。今爲圃」



写真番号（10）九の坪城址（西春村大字九之坪字城屋敷75）



「現今、畑地の中に無銘石一基を存するのみ」…西春日井郡誌  
現在は施設が建設されている。

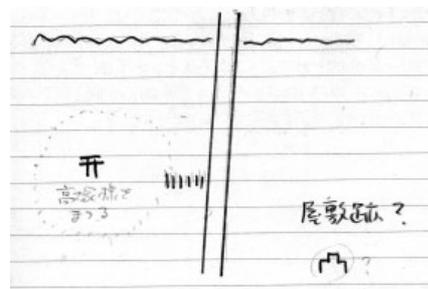


当時、石はあった。

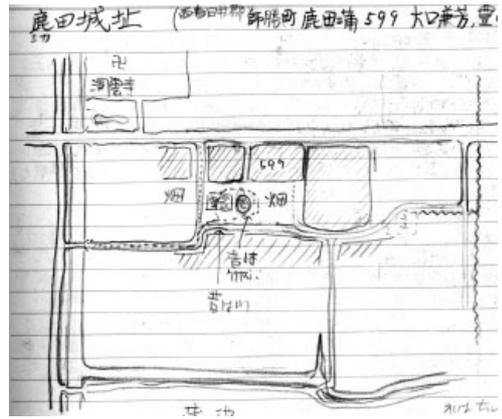
写真番号（11）高塚山城址（西春村鍛冶が一色）



高塚山（西春日井郡西春町鍛冶一色）



写真番号 (12) 鹿田城址 (師勝村鹿田蒲, 蒲屋敷)



鹿田城跡の池 (当時の聞き取りメモ)

むかし六十年ほど前か (明治末期)、蒲が池は今の4倍はあった。竹藪の中にあつて、6坪ほど、大きく深くて泳ぐことができた。多の井戸や川が涸れてもいつも水を湛えていた。地下水脈に通じているらしい。向かいの家に流しができ、汚水を流すようになり、水も土も腐ってだんだん埋まり、西には家が建つて、今のようになつた。江南の小口神社に大口左京進の鎧、兜があるとときく。地名に土居裏。